

聞一多と梁実秋

—— 乗り遅れてしまった青年、梁実秋 ——

鈴木 義昭

キーワード：聞一多 梁実秋 胡適 バビッド シェークスピア全集

一 はじめに

聞一多と梁実秋の交友関係を語ることは、少し大げさに言えば、激動の二十世紀とその世界とを語ることに相等しい。四歳違いである両者は、ともに半植民地下の近代中国に生まれ、激動の時代を生き抜いた人間だからである。しかも、ともに不幸にして異郷の地に在って、一生を終えている。かたや、聞一多は、昆明において劇的な暗殺死を遂げ、一方の梁実秋は、台湾において故郷北京への思い止むことなく、心筋梗塞のため、幽冥境を異にしている。近年、両者の評価は次第に高まってはいるものの、前者は愛国運動の闘士として遇されることが多く、後者は、少数の例外を除いて、虚心坦懐にその作品を読み、公平な評価を下す時間に恵まれていないと言つてよいであろう。^①

ここで私が考えてみたかったのは、大きく言えば、両者の交友関係の真相に迫ることである。例えば、詩人と非詩人とはどこに違いがあるかということと言い換えてもよいし、ともに、ほぼ同じ時期に詩人として出発し、かなりの時期、同じ傾向を持ちながら、後に次第に角度が開いてしまう兩人について、その距離を測ってみたいと考えるから

である（前者については、稿を改めることとしたい）。

本稿においては、何かをするに当たって、十分な資格を備えているにもかかわらず、何故か機会に乗り遅れてしまふ文学者、梁実秋について、述べてみたい。特に、毛沢東・魯迅等との関係からは、ヒール或いはファロスを演じるを得ない梁実秋。⁽²⁾そしてまた、今日の我々の立場からすれば、触れることの少ない、梁実秋について、限界等も勘案しながら、触れてみたいと思う。

二 出会ひ

聞一多と梁実秋の出会いは、一九一五年九月、今から九十二年前に遡る。場所は、北京市西北郊外の清華学校、その中等科においてであった「はず」である。ここで、『はず』である」と言うのは、兩人とも同じ学校に在学していたこの時期（学籍上では、である）、二人の間には、特別な触れ合いがあつた形跡はないからである。親しい付き合いが成立するには、実質的にはあと八年、少なくとも五年の歳月の成熟が必要であつたと言える。彼ら二人の場合、絵画がその縁を結ばせる機縁となつた。

聞一多は、一九一九年九月、楊廷宝、方来たちと美術社を組織する。⁽³⁾一年前には正式な会ではなかつたが、この年、聞一多たち三名（楊廷宝、方来）によって、正式な組織になつた。会則を定めるとともに、当時、清華の絵画教師であつた、スタール女史に顧問となつてもらい、というよりはむしろ、スタール先生の方から聞一多たちに内示すなわち、「会を作つたらどうか」という提案があつたようである。スタール先生の指導の下に、デッサン、水彩画、ペン画、油彩等の練習を行った。⁽⁴⁾聞立鵬・張同霞『聞一多』には、スタール先生 (Miss Starr) の写真が挙げられ

ている。画家でもある聞立鵬氏ご夫妻の著書ならでは、の配慮であろう⁽⁵⁾。もう一人の女性絵画教師、リグゲイト先生 (Miss Lyggate) は、名前だけが挙げられているのみで、二人とも年齢・経歴等、不詳であるのは、残念である。梁実秋の名前は、ここにはまだ、登場しない。何分にも、梁実秋は、高等科に入学したばかりであった。

一九二〇年十二月一日、聞一多は、浦薛鳳、梁思成たち十四人と文学、音楽及び各種の芸術を研究する団体、「美司斯 (The Muses)」を結成した。会員としては、吳沢霖、楊廷宝、董大酉、方来、梁実秋、梁思成、黄自、徐宗洙、王繩祖たちが加わった⁽⁶⁾。ここに至って初めて梁実秋の名前が見える (先に私が、「少なくとも五年」と言った意味はこれによる)。ただ、梁実秋は「美司斯宣言」に名前を連ねるには至っていない。下級生であったことによるものであろうか。

結成から十日後の十二月十日には、「美司斯」成立大会が開かれる。会には、梁啓超がすでに高名な思想家、評論家であったのを除き、陳師曾、吳新吾、江少鶴、劉雅農と言った人々は、新進気鋭の芸術家であった。こうした五人が招かれ、公演が行われた。陳師曾は、「中国画は進歩的なものである」の題で、吳新吾は、「フランス絵画小史」、江少鶴は、「絵画学の評論と作品」、劉雅農は、「芸術と個性との関係」、梁啓超は、「中国古代の真善美の理論」の題で、それぞれ講演をしたのであった⁽⁷⁾。

ミューズは五人を組織委員に選んだ。聞一多は、書記に選ばれた。成立大会の翌日、第一回の会議を開き、会を音楽、絵画、文学、美学の四部門に分け、週に一度会を開くことにした⁽⁸⁾。明くる年の一九二一年一月八日、錢稻孫を招き、第一回目の、美学に関する講演会を開いた。しかし、「美司斯」の活動期間はそれほど長くは続かなかった。興味の赴くところが他に移ったからでもあるし、金銭的な面でも、経費が欠乏したため、会は、二度と開かれなかったのである。聞一多は、「上社」の活動に精を出すことになる。これに梁実秋たちは、加われなかった模様である。

梁実秋は、音楽・絵画・書道に興味があり、中等部入学当初、音楽の Miss Sealey が彼の声のよさを買って、清華少年合唱団の団員に推薦したと言う。シーリー先生が帰国してしまったため、音楽への道を断たれてしまい。(9) 『清華八年』(二七頁)、吳卓、張嘉鏄と図って、「清華戲墨社」(梁実秋の父親が命名した)を結成したと言う。(10) (梁実秋『清華八年』三九頁等)。後に、ボストンで中国古典劇の公演を行った時、『琵琶記』において主人公の蔡中郎を演じたのが梁実秋であったと言えば、その喉自慢ぶりが分かると言うものではないか。ちなみに、謝冰心は、丞相の娘を演じたと言う。(11) それに先立って、ニューヨークでは、「長恨歌」(またの名は、「この恨み連綿と」)の公演があつたが、梁実秋は、これには参加しなかつたようである。

先輩たちが作つたサークル運動に乗り遅れた形の後輩たちは、同年三月、「清華戲墨社」を發展解消した形で、「小説研究社」を作る。社員には、梁実秋、顧一樵(毓琇)、翟毅夫(桓)、齊学啓、李滌静、吳錦銓、張忠紘たちがいた。後に梁実秋は、

我從事文藝寫作是在我進入高等科之初、起先是幾個朋友(顧毓琇、張忠把、翟袁等)在校慶日之前湊熱鬧翻譯了一本「短篇小說作法」、這是一本沒有什麼價值的書、不知為何選中了它。我們的組織定名為「小説研究社」、向學校借佔了一間空的寢室作為會所。

と述べている。(12) 「短篇小説作法」とあるが、残念ながら、これが誰の原本から翻訳したものかは、明らかではない。「小説研究社」は、一九二〇年十二月十一日、梁実秋、顧毓琇、翟桓、張忠紘、李迪俊、吳文藻、齊學啓の七人を創立メンバーとして成立した。後に、聞一多の建議を容れて、頭に「清華」を冠し、「清華文学社」とし、メンバーに

も聞一多、時昭瀛、呉景超、謝文炳（匿名）、朱湘、饒孟侃、孫大雨、楊世恩たち（以上四名は、「聞一多の四子」と呼ばれる）が加わった⁽¹³⁾。『清華八年』四〇頁）。周作人に日本の俳句について述べてもらったり、徐志摩に「文学と人生」の題で講演してもらっているが、これは、聞一多が学校を離れ、アメリカ留学に行つてからのことになる。⁽¹⁴⁾『談聞一多』八頁 伝記文学出版社 一九六七年）。

なお、二人がアメリカと中国に別れ別れに住んだこと、その間の手紙のやり取り、二人のアメリカでの留学生活（コロラド・スプリングスでの学問の日々、ニューヨークでの国粹団体「大江会」創設とその運動への参加、中国古典劇の公演等々）、そして、中国に戻つてきてからの活躍ぶり（北京「晨报副刊」「詩鐫」、「劇鐫」での評論活動、上海での「新月」発刊等々）は、よく知られているため、本稿では敢えて触れないこととする。以下は、二十年後の聞一多、梁実秋のことである。

三 別れ

一九四六年七月十五日、二人は、永遠の別れをすることになる。聞一多が国民党特務の放つた数発の銃弾に命を断たれたからである。

それに先立つ九年前の一九三七年六月二十三日、梁実秋は、胡適とともに、蒋介石・王精衛主導の下に、開かれた「廬山談話会」に出席する⁽¹⁵⁾。また、彼は、同年の七月六日〜十五日まで、漢口で開催された「国民参政会」に、参政員の資格で出席する。九月には、張道藩の招きに応じて、重慶の国民政府教育部特約編集員兼教科書編集委員会常務委員として、戦時下の後方で必要とされる、小中学校教科書のための編集委員会の主任をも兼ねる⁽¹⁶⁾。そのため、

それまでの勤務校、北京大学が清華大学、南開大学とともに、武漢、長沙、昆明と移って行くのに乗り遅れ、西南聯合大学に合流することはできなかったのである。あの胡適も、西南聯合大学の教職員名簿に名を連ねたにもかかわらず、彼はそれができなかった。十二月一日には、重慶の「中央日報」で、「与抗戰無關係」論争が起こり（後述⁽¹⁷⁾）、梁実秋の歩む道は、大陸の道から次第次第に角度を開いていくのである。

では、何故、そうなっていたのか、その原点の一つは、一九三四年にあると思われる。時間をさらに一九三二年に戻してみることにしたい。

以下にも述べるように、一九三二年九月、聞一多は、二年間を青島で過ごしただけで、清華大学の招請を受け、母校に戻る⁽¹⁸⁾。梁実秋は、一九三四年、山東青島から、ようやく北京に戻ってくる⁽¹⁹⁾。二人は、尻尾を巻いたような形で、それでいて晴れがましく、一人は母校の清華大学に、今一人は、北京大学に職を得て、帰ってくるのである。以下、梁実秋の方に重点を置きながら、年代順に眺めていきたい。

一九三四年、梁実秋は、胡適の招きを受けて、北京大学にて教鞭を執ることになった。青島大学では、大学側が学生運動に参加した若干名の学生の退学措置を支持したため、愛国的な学生運動と対立する局面を持った。これは、聞一多も同じことで、そこからエスケープしたという意味で、私は「尻尾を巻いたような形で」と評したのであるが、劉炎生は、

梁実秋和聞一多當時不理解愛國學生以罷課請願的方式要求國民政府抗戰的必要性、並站在學潮的對立面、自然是錯誤的、受到學生的反對和衝擊是必然的。

と好意的に見ている。⁽²⁰⁾ これも、梁実秋の乗り遅れた原因の一つではある。

北京で暮らすことについて、梁実秋の方は北京生まれの北京育ちであったから、住居に困るうハズはなく、やや広い建物に父母と同居することになった。聞一多は、清華大学の西にある、達園を仮の宿りとしたのであった。また、胡適は、「君たち二人の飲みっぷりを見てみると、青島は（君たちにとつて）、長居するところじゃないね。やっぱり、北京に帰っておいでよ」と言ったと言う。⁽²¹⁾（梁実秋『飲酒』。二人をよく知る胡適ならではの、の見方である。

時代の新しい到来というものは、これまでの事象を一気に変化させるのではなく、ある時点に至るまでの間にも、変化の兆しを含んでいるものである。聞一多と梁実秋の進角角度も、この年を境として、次第次第に開いていくように見える。一方が魯迅に近づき、一方が胡適に接近していくように、である。聞一多と魯迅との関係については、以前にも述べたことがあるので、本稿では触れないことにするが、胡適と梁実秋については、少し触れておかねばならないであろう。最終的には、これが聞一多と梁実秋二人の到達点の違いとなっているからである。

この年（一九三四年）、梁実秋は、『偏見集』、『文芸批評論』を出版する。

同年（一九三四年）五月、雑誌『学文』が発行される。このことについても、拙論において述べたとおりである。⁽²²⁾ 裏に胡適の影が見え隠れする。編集長は「新月」の同人でもあった、葉公超ということになっていたが、実質的には、聞一多が編集長に擬せられており、梁実秋もこれに名を連ねていた。⁽²³⁾ ただ、この雑誌は、金銭的な問題もあり、四号をもって休刊の止むなきに至った。なお、梁実秋は、カール・マルクスの「シエークスピア金銭を論ず」（翻訳）を掲載し、聞一多は、『学文』一期、三期に「匡齋尺牘」を掲載した。⁽²⁴⁾ 何故かその続稿が梁実秋の手に残り、「鬼置」詩の解釈に資するところがあった（『談聞一多』〔附録〕）と言う。⁽²⁵⁾

同年十月、梁実秋は、『現代』五卷六期に『バビッド及び人文主義』を発表する。バビッドについては、一九二四

年秋、ハーバード大学大学院で、バビッドの「十六世紀以降の文芸批評」を学んでからと言うもの、バビッドの人文主義の影響は極めて大きく、彼が従来持っていたロマン主義的思想から、人文主義思想へと転換したという意味で、大きな変化を齎した。聞一多にもあった、浪漫主義的資質は、アメリカ留学滞在中に次第次第に変化していったのである。梁実秋がバビッドの人文主義を敢えて持ち出したには、朱光潜のカント↓クローチエというラインナップに対抗する意図もあった⁽²⁶⁾のではないかと思われる。美学の本流は、カント↓クローチエ流ではなく、さらに古く、ローマのキケロ↓イギリスのバビッド流であるとの自負があったからではないだろうか。

一九三五年十一月には、冰心、張東蓀、羅隆基たちと週刊『自由評論』を創刊し、文化、時事、政治の評論の活動基盤とした（一九三五年十一月〜翌年十月、全四七期）。彼らはいずれも、清華の卒業生で、梁実秋のアメリカでの留学仲間であった。この雑誌では、国民党の対日「不抵抗主義政策」を批判したため、特務が付きまとうということもあった。梁実秋はこの時期までは、少なくとも「抗日救国」の立場に立っていたことは事実である。十二月には、『東方雜誌』に「文学の美」を発表する。北京大学での同僚、朱光潜の美学思想を相当に意識したものであった。ここにも、「一方に偏らない」という胡適の「配慮」を見て取ることができるであろう。すなわち、朱光潜がクローチエ流の美学であったのに対して、梁実秋の拠って立つ基盤は先にも出たバビッド流人文主義であった。キケロとルネッサンスといったヨーロッパ的思想のルーツを重要視する梁実秋を同じ時期に北京大学に招いた胡適の見えない手を感じる事ができよう。ちなみに、梁実秋は、一九三一年、すでに商務印書館から中国語訳『キケロ文録』（西塞羅文録）を出版しているほどである。⁽²⁷⁾

一九三六年、商務印書館から、梁実秋訳のシェークスピア戯曲八種を刊行する。すなわち、「ハムレット」、「マクベス」、「リア王」、「オセロ」、「ベニスの商人」、「お気に召すまま」、「テンペスト」、「第十二夜」の八冊である。⁽²⁸⁾こ

れは、一九六八年の『シエークスピア全集』全四十冊の翻訳の先鞭を付けたものである。『シエークスピア全集』の翻訳は、一九三二年、胡適の主導で、聞一多たちともに行うことになっていた。ちなみに、この年の段階で、聞一多は、「ハムレット」を訳し、梁実秋は、「マクベス」を担当することになっていた。その他、徐志摩『ロミオとジュリエット』、葉公超『ベニスの商人』、陳通伯（陳西滢）『お気に召すまま』がメンバーであった⁽²⁹⁾。しかし、実現はしなかった。

四 受難の日々

一九三七年六月二十三日 蒋介石、汪兆銘が連合して開いた盧山学界名士談話会に出席する。その招きに応じたのは、当時一流と目された二三〇人であった。その中には、胡適、張伯苓、洪深、黄炎培がいた。梁実秋は、北京北辺に展開する日本軍の情勢を危惧して、会議が終了しないうちに、北京に帰る⁽³⁰⁾。果たして、七月七日、盧溝橋事変が勃発した。しかし、七月六日と十五日、国民参政会が漢口で第一回会議を開くと、彼はそれにも出席した。二十八日には、北平が陥落した。名前がブラックリストに載せられていることを知り、単身北京を離れ、天津、青島、濟南經由で南京に赴く。その後、一月余り長沙に滞在し、また、北京に戻り、家族を伴って南下する⁽³¹⁾。

一九三八年七月、国民参政会参政員となる。香港に行き、漢口に飛び、漢口から重慶に入る。同月、教育部特約編集員兼教科用書編集委員会常務委員となる⁽³²⁾。中小学教科組主任となる。後に、教育部属国立編訳館翻訳委員会主任兼社会部主任となる。同年十二月、続いて重慶『中央日報』副刊「平明」を編集し、「編者の話」を発表し、「文学と抗戦とは無関係である」論争を引き起こす。梁実秋は、

現在抗戰高于一切、所以有人一下筆就忘不了抗戰。我的意見稍微不同。于抗戰有關的材料、我們最為歡迎、但是于「抗戰無關」的材料、只要真實流暢、也是好的、不必勉強把抗戰截搭上去。至于空洞的抗戰入股、那是對誰都沒有宜處的。

と書く。⁽³³⁾

この一件も梁実秋と大陸との角度を払げることになった。懸命に抗日戦争を戦っている人々に煮え湯を飲ませる結果になったことは、想像に難くない。後に、毛沢東に会見を拒否されるのも無理からぬことである。⁽³⁴⁾ 始めの進角は小さいものでも、後々、大きな角度になるということであろうか。

一九三九年五月、教科書編集委員会とともに、重慶北碚に移る。秋、清華同窓の呉景超及び夫人の龔業雅と資金を出し合つて、重慶の北碚主湾一〇号に平屋一棟を買い、「雅舍」(業雅の舍)^{いゝ}と名付けた。後に、「雅舍」の題名を持つ作品に散文集七冊があり、「雅舍」シリーズを形作っている。

一九四〇年一月、華北慰勞視察団に加わり、重慶から出発し、成都、鳳翔、西安、洛陽、鄭州、襄樊、宜昌、遵水等と回り、二ヶ月に及んだ。延安に行つて毛沢東と会おうとしたが、受け入れられず、取り消しとなった。その間の経緯は、

國民參政會華北慰勞視察團前來訪問延安、甚表歡迎、唯該團有青年黨之餘家菊及擁汪主和在參政會與共產黨參政員發生激 衝突之梁實秋、本處不表歡迎。如果比欲前來、當以本地特產高粱酒與小米飯。

と本人が書いている。⁽³⁵⁾

同年七月、編集館社会組主任及び翻訳委員会主任となる。

「子佳」をペンネームとし、『星期評論』および、『世紀評論』で、「雅舍小品」の専用コラムを担当した。

一九四二年五月、毛沢東は、「延安での文芸座談会での講話」（『文芸講話』）で、梁実秋の「超階級文芸観」を批判する。⁽³⁶⁾ 数え上げてみれば、「新月社」社員時代における、魯迅との論戦、「抗戦無関係論争」、「延安入城拒否」等々、毛沢東と梁実秋との関係が芳しいものであるとは思えないであろう。

張道藩が「我們所需要的文芸政策」（『文化先鋒』創刊号）を書いたのを受けて、「関于『文芸政策』（『文化先鋒』第一卷第八期）を書く。その論点は、以下の五つの部分になる。

- 一・ 文芸は、英米のように自由に発展させるべきである。
 - 二・ 国民党政府が所謂「文芸政策」を用いて、文学作品を取り締まることに反対する。
 - 三・ 文芸が全民衆を対象とすることには賛成するが、資産階級のために書くことに反対する。
 - 四・ 大いに「西洋文学の理論と作品」とを紹介するよう、主張する。
 - 五・ 文学は、「必ずしも労働者、農民に限定されない」と考える。
- というものである。⁽³⁷⁾

一九四三年春、梁実秋の母親が北京で病没する。妻子を引き取るのいい機会と考えて、一緒に暮らそうとする。妻程季淑が子どもを連れて長軀、北京より四川に入り、一家団欒の時を持った。⁽³⁸⁾

一九四五年八月十日、宣伝ビラにより、日本の無条件降伏を知る。昆明にいた聞一多もやはり、この日、日本軍の敗戦を知る。

一九四六年七月一日、聞一多暗殺のニュースを聞き、その時の状況を次のように書いている『回憶抗戰時期』。

やり切れぬ思いに、机を叩いて長嘆息をつき、力を入れたため、将棋の駒が地面一杯にぶちまけられ、床板の隙間に入ってしまったものもあった。

と。⁽³⁹⁾
また、

聞一多短短い一生、除了一死轟動中外、大抵は平靜安定的、他過的是詩人與學者的生活、但是對日抗戰的爆發對于他是一個轉樞點、他到了昆明後似乎是變了一個人、于詩人學者之外又成了一位斗士。抗戰軍興之後、一多一直在昆明、我一直在四川、不但未能有一次的晤面、即往返書信也只有一次、那是他寫信給我腰我他的弟弟家駒一法文的職位。所以、聞一多如何成為斗士、如何斗、和誰斗、斗到何種程度、斗出甚麼名堂、我一概不知。……聞一多在昆明那精彩的一段、應該由更有資格的人來寫。

と。⁽⁴⁰⁾

同年初、四川（重慶）から国民参政館の汽船で、南京の国立編訳館に戻るが、南京政府の機構の中で仕事をするのを潔しとせず、上海に帰るという口実で、さらに空路、北京に帰り、北京師範大学英語科の教授となる。冬休みには、当時のインフレのため、瀋陽に集中講義に行く。⁽⁴¹⁾（私立東北中正大学外文系）。

一九四七年一月、張純明求めにより、『世紀評論』、『星期小品』に陸続と「雅舍小品」シリーズを書き続ける。⁽⁴²⁾

一九四八年冬には、中国人民解放軍が北平を解放する。天津も間もなく解放されるといふ時になって、梁実秋は、また、情勢判断に誤謬を生じてしまうのである。当時、広州の中山大学学長であった陳可忠の招きを受けて、同大学へ赴任することにしたのであった。十二月には、一男一女を連れて、再南下する。しかし、長女文茜は、北平に残り、北京大学農学院に通うことになった。中山大学で教鞭を取る以外に、私立文化学院で兼職する。⁽⁴³⁾

一九四九年六月、梁実秋は、台湾海峡を渡り、二度と大陸の地を踏むことはなかった（実際は最晩年（一九八七年一月北京訪問の予定）⁽⁴⁴⁾にチャンスはあったが、病魔の阻むところとなった）。中山大学が気に入らなかつたのではなかつたが、四月に入ると、中国人民解放軍が南京を開放したのである。中山大学に仮住まいしていた、教育部の関係者から、台湾で「国立」編訳館を再開するという話を聞き、梁実秋は、熟慮することなく、この招請を受けたと言う。⁽⁴⁵⁾確かに、彼は共産党（的）人士と論争はしたが、この時点でブラックリストに載っていたかどうかは定かでない。台北に行かずに済んだかもしれないが、臆測の域を出ない。

梁実秋は、編訳館の代理館長を務める。後、台湾国立台北師範学院英語系（後に、国立台湾師範大学英語系と改められる）で教鞭を執る傍ら、散文の名手として、聞一多、徐志摩の伝記等を書いている。英文学の教授としての梁は、先述のとおり、胡適の「指示」をよく守り、一九六六年には、『シェークスピア生誕四〇〇周年記念集』を刊行し、一九六八年には、懸案であった『シェークスピア全集』全四〇巻の翻訳を行い、それを完成させている。⁽⁴⁶⁾

五 おわりに

聞一多の出身は、中小地主階級、梁実秋のそれは、中下層官僚であった。ともに知識分子の出身であることには間

違う。そうした二人が北京で出会い、青春時代を過ごし、さらには同時期にアメリカに留学し、帰国後はかなりの年代を同じ陣営に属するものとして活躍し、同僚として同じ大学に勤務もしたのであった。しかし、最後の地点で異なった立場に立ったため、死地を等しくすることを得なかった。中国の長い歴史の中では、そうした友情も稀有なことでもなかったはずであるが、現に、聞一多と胡適、聞一多と余上沅等という組み合わせを考えることもできるはずであるのに、聞一多と梁実秋という組み合わせは、格別な思い入れをわれわれに強いるものようである。それが何であったのかに答えたいとの思いがこの論文の出発点であったはずであるのに、なおそれに答えられていない自分を発見する。人間の運命の過酷さを思う次第である。

今回、梁実秋を調べてみて、改めて梁実秋関係の書籍、特に全集の不備に愕然とした。徐志摩の全集を編んだのが梁実秋であることを考え合わせて見る時、その完成が一日も早からんことを祈るばかりである。

注

- (1) 『梁実秋雅舍雜文』「代序——我看梁实秋」〔從《毛選》一条注釈説起〕（葉永烈）（上海人民出版社——二頁一九九三年）には、其實、對於梁實秋の評價、一味推崇大可不必、一口否定更不應該。滿種極端均不足取。眼下、已是到了可以對他進行一番實事求是的公允的評價的時候了。

とある。

- (2) 同上に、

以《毛澤東選集》的權威性，那注釋出自《中共中央《毛澤東選集》出版委員會》之手，無疑如同「一紙最高法院的宣判書，給梁實秋定《案》」。

とか、

人們除了在學習《毛選》時那條注釋中知道有那嚟個《反革命》的梁實秋之外，便是從中學課本中魯迅雜文里知道有那嚟個《喪家的》資本家的乏走狗梁實秋。

- (3) 聞黎明・侯菊坤『聞一年多譜長編』（一九九四年七月 湖北人民出版社 八七頁 以下、聞・侯『年譜長編』と略称する）に、是月 與楊廷寶、萬來等發起組織美術社。

- (4) 聞・侯『年譜長編』（八八頁）に、

一九一九年秋天教師司達爾女士示意聞一多、楊廷寶、吳澤霖、方來等發起一個美術社。起初會員有二十餘人。他們的職員有會長、書記、會計並會所管理。他們的進行方法分兩種；一實習、二研究。實習每星期自二小時至四小時。所用的畫具有鉛筆、鋼筆、水彩、油彩、木炭等。

とある。

- (5) 聞立鵬・張同霞『聞一多』（人民美術出版社「中華名人叢書」所收一九九九年十一月 二六頁）の写真、参照。

聞・侯『年譜長編』一一四頁に引く、浦薛鳳「憶清華級友聞一多」、「清華週刊本校十周年紀念号」所収の「美司斯」による。

- (6) 聞・侯『年譜長編』一一六頁に引く、「清華週刊」二〇三期によれば、

會序中有梁任公先生及中國當代美術名家陳師曾、吳新吾、江少鶴、劉雅農四先生至演講。陳先生講題為《中國畫是進步的》、吳先生《法國繪畫小史》、江先生《畫學之評論與作品》、劉先生《藝術與個性之關係》、梁先生略講《中國古代真善美之理論》、…とある。

- (8) 聞・侯『年譜長編』一一六頁に引く、「清華週刊」第二〇三期「美司斯成立会」によれば、

當時決定分音樂、繪畫（包擴雕塑、建築）、文學、美學四門，每個星期開研究會一次、…とある。

- (9) 梁実秋『秋室雜憶』所収「清華八年」（伝記文学出版社一九六九年）二七頁に、

教音樂の Miss Seeley 和教圖畫の Miss Starr 和 Miss Lygate 都放迪了我對藝術的愛好。我本來喉音不壞，被選為「少年歌詠團」の團員、…。以後我倒了嗓子，同時 Seeley 女士離校後也沒有替人指導，我對音樂便失去了興趣、…。

とある。

(10) 梁実秋『秋室雜憶』所収「清華八年」三九頁に、
 ……於是我就着手組織、徵求同好。我的父親給我們起了一個名字、曰：《清華戲墨社》。
 とある。

(11) 梁実秋『秋室雜憶』所収「琵琶記的演出」五八頁に出演者の人名が出ている。

蔡中郎 梁實秋

趙五娘 謝文秋

丞相之女 謝冰心

牛丞相 顧一樵

丞相夫人 王國秀

鄰人 許宗涑

瘋子 沈宗濂

(12) 梁実秋『秋室雜憶』所収「清華八年」四〇頁。

(13) 梁実秋『秋室雜憶』所収「清華八年」四〇頁。

(14) 梁実秋『談聞一多』(伝記文学出版社一九六七年)八頁に、

後來我們清周作人教授來講過一次日本的俳句、也請過徐志摩來講過一次文學與人生、那都是一多離校以後一年的事了。
 とある。

(15) 年譜については、以下の三種の伝記の記事と年表の類を勘案しつつ、利用した。梁実秋『梁実秋散文』(四)所収「梁実秋先生

年表(中国広播電視出版社一九八九年北京)、魯西奇『梁実秋伝』「梁実秋年譜」(中央民族大学出版社一九九六年北京)、

劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」(百花洲文芸出版社一九九五年南昌)。

注(15)に同じ。

(16) 本編七九—八〇頁参照。

(17) 聞・侯『年譜長編』四二七頁に、

(18)

是月 應聘為國立清華大學中國文學系教授。學校本擬聘先生任系主任，…。

とある。

(19) 注(15)に同じ。

(20) 劉炎生『才子 梁実秋』一七三頁。

(21) 梁実秋『飲酒』(『梁実秋散文』(三) 中国廣播電視出版社一九八九年十二月北京) 八三頁に、

看你們喝酒的樣子，就知道青島不宜久居，還是到北京來吧！

とある。

(22) 拙論「聞一多の見た魯迅」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』一〇)

(23) 拙論「雜誌『学文』を巡って—聞一多と林徽因の立場から—」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』一四)

同上。

(24) 梁実秋『談聞一多』(伝記文学出版社一九六七年一月) 一一四—一二二頁。

(26) 拙論「雜誌『学文』を巡って—聞一多と林徽因の立場から—」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』一四)

(27) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三二九頁に、

本年、中譯西塞羅文祿由商務印書館出版。

とある。劉炎生『才子 梁実秋』一七九頁に、

梁実秋の這些言論態度、當時曾引起了國民黨政府的注目、甚至派遣特務監視他、在他的來訪者中時有不三不四的人。

とある。

(28) 魯西奇『梁実秋伝』「梁実秋年譜」二七二頁には、

出版所譯莎劇丹麥王子哈姆雷特之悲劇(商務印書館版)、至一九三九年、共出八種。

とある。

(29) 聞・侯『年譜長編』四〇五頁に、

(附記) 全集應如何分配、可于第一次年會決定。現為進行便利記、先每人認定一種、立即試譯。現假定每人認譯一種如下：

徐志摩 Romeo and Juliet

葉公超 Merchant of Venice
 陳通伯 As you Like It
 聞一多 Hamlet
 梁實秋 Macbeth

とある。

(30) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三一九頁による。

(31) 同上。

(32) 同上。

(33) 劉炎生『才子 梁実秋』第九章、一九三頁に引く、十二月六日「中央日報」による。

(34) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三三〇頁によれば、

一月三〇日至三月、參加國民參政會華北視察慰勞團、赴華北一帶地區慰勞視察。原計劃中有延安之行、因為毛澤東致電參政會表示不歡迎梁實秋和余家菊前往而取消此行。

とある。

(35) 梁実秋『秋室雜憶』所収「華北視察散記」八九頁には、

國民參政會華北慰勞視察團前來訪問延安、甚表歡迎、惟該團有青年黨之余家菊及擁汪主和在參政會與共產黨參政員發生激烈衝突之梁實秋、本處不表歡迎。如果必欲前來、當饗以本地特產之高梁酒與小米飯。

とある。

(36) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三三〇頁。

(37) 劉炎生『才子 梁実秋』第九章「在抗戰的日子裡」二〇六—二〇八頁の記載に従う。

(38) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三三〇頁。

(39) 劉炎生『才子 梁実秋』「在抗戰的日子裡」二一二頁より轉載。

(40) 同上。

(41) 同上。

(42) 同上。

(44) 冰心「悼念梁実秋先生」〔『槐園夢』所収。安徽文芸出版社一九九五年三月〕によれば、梁実秋の娘が冰心を尋ねてきて、

多嚙不幸！就在昨天梁文茜對我說她父親可能最近回來看看的時候，他就在前一天與世長辭了！

と言ったとある。劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三三〇頁。

(45) 劉炎生『才子 梁実秋』第十章「三 又一次選択」二二〇頁には、

梁実秋沒有做過多的考慮、便接受了這一要請。

とある。

(46) 劉炎生『才子 梁実秋』「梁実秋年表」三三三頁同上。

本稿は、二〇〇七年七月七日（土）二松学舎大学にて開催された第十一回日本聞一多学会における発表草稿「聞一多と梁実秋―
乗り遅れてしまった青年、梁実秋―」に手を入れたものである。

